

4. 福田貝塚・椎塚貝塚の現地踏査

大阪歴史博物館所蔵の下郷伝平コレクションの共同研究の一環として、コレクションを構成する主要な資料群が出土した茨城県の福田貝塚・椎塚貝塚の遺跡としての現状を把握するため、現地踏査を数回にわたって行なってきた。このうち2010年1月31日および2011年1月30日に実施した現地踏査の成果についてはすでに報告されている〔阿部ほか2011〕。今回はこの報告の成果を確認しながら、その後2011年12月17日に再度実施した現地踏査の成果を加え、縄文後晩期集落としての両遺跡について概観してみることにしたい。

1. 福田貝塚

1) 福田貝塚の立地

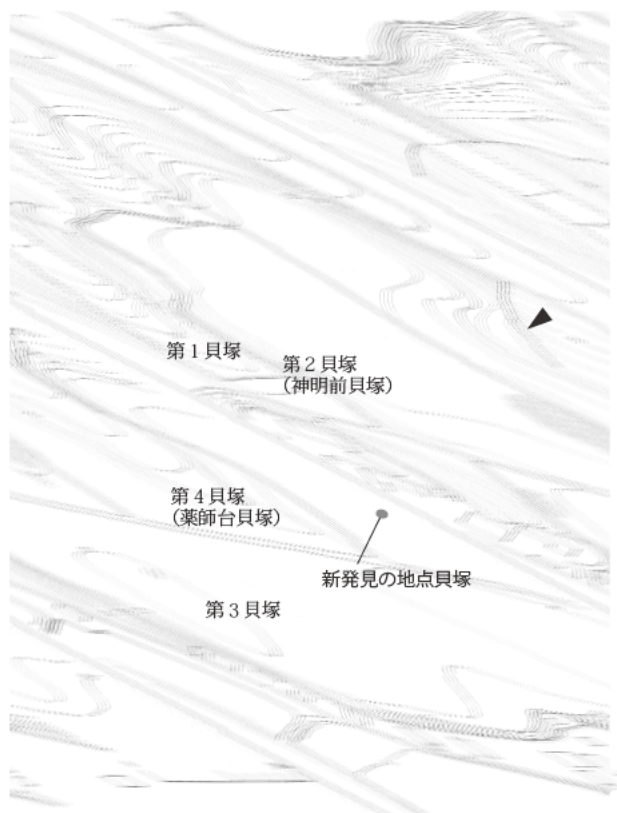
茨城県稲敷市（旧稲敷郡東村）に所在する福田貝塚は、霞ヶ浦南岸の阿波台地上に位置している。遺跡は標高25mの広い台地上平坦面にひろがっているが、北側は台地を樹枝状に浸食する深い谷によって画されており、この谷につづく小谷が遺跡の東および西側を画している。また南側は急な斜面で利根川に通じる沖積地に面しているが、この沖積地へとつづく小谷が遺跡の西側に入り込んでいる（第1図）。

貝層は、台地西側に北方から入る小谷へつづく台地縁辺部に第1貝塚、南方から入る小谷へつづく台地縁辺部に第4貝塚、台地中央部の高まりに第2貝塚、第2貝塚と相対する南側の高まりに第3貝塚が確認されている^{（註1）}。地元の方への聞き取りでは、さらにこのほかにも貝殻の散布地が多く存在したとのことであったが〔阿部ほか2011, pp. 105〕、2011年12月の踏査で新たに地点貝塚を発見することができた。

2) 新たな地点貝塚の発見

第2貝塚の南東、北方から遺跡の東側に入り込む小谷の谷頭に近い場所で、畑の造成によって切られた段差部分に貝殻の小規模な散布を確認した（第1図・写真1）。貝殻は東西約8mの範囲にひろがっていた。耕作によって貝殻は細かく砕かれていたが、ハマグリ・サルボウ・オキシジミ等鹹水産の貝類を認めることができる。

この地点貝塚周辺で採集できた遺物を第2図に示した。1は頸部でくびれ口縁部が開く堀之内1～2式の鉢形土器で、地文に縄文が施される。2も同時期の所産と考えられる。地文に縄文が施され、深い沈線で区画されて



第1図 福田貝塚周辺地形図（1/5,000）



写真1 新発見の地点貝塚（東から）



写真2 谷から地点貝塚をのぞむ（第1図中矢印方向）

いる。このほかに加曾利B式と考えられる土器の細片も周辺に散布していたので、本地点貝塚の形成時期は縄文後期堀之内式～加曾利B式におおよそ比定される。

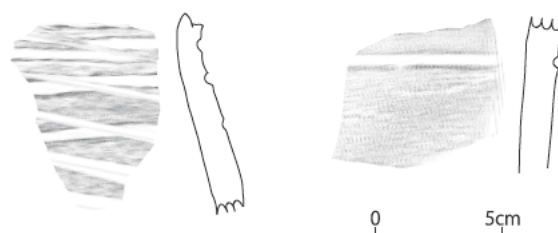
〔阿部ほか 2011〕において、第1～4貝塚は台地西方から侵入する浅い溺れ谷によって形成された窪地を取り巻くように分布する点列環状貝塚と指摘された。今回発見した地点貝塚も、同様に中央の窪地を取り巻く軌道上に位置しており、形成時期も他の貝層とほぼ同時期と捉えられ、この点列環状貝塚の一面をなすものと評価できる。窪地を取り巻く高まり上からは今後も新たな地点貝塚が発見される可能性が高い。

2. 椎塚貝塚

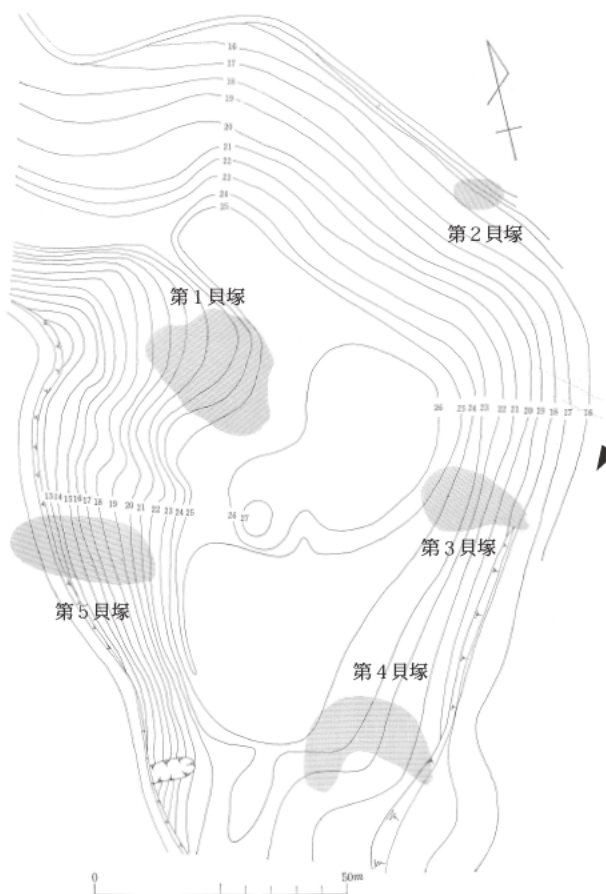
1) 椎塚貝塚の立地

椎塚貝塚は茨城県稲敷市（旧江戸崎町）に所在し、遺跡の西側を流れる小野川の沖積地に突出する、標高約25mの痩せ尾根状の台地に位置している（第3図）。貝層はこの台地斜面に5ヶ所確認されており、西側の小野川沖積地に面した斜面に第1・第5貝塚、台地を浸食して遺跡東側に入り込む小野川の支谷に面した斜面に第2～4貝塚が形成されている（註2）。

第1貝塚および第4貝塚の位置する斜面では2010・2011年1月の踏査時多数の盗掘坑の存在を確認し、廃土の周辺には大量の遺



第2図 福田貝塚新地点貝塚採集遺物（S=1/3）



第3図 椎塚貝塚地形図（1/1,500）

物が廃棄されていた^(註3)。盗掘は貝層部分のみを狙って掘られており、このとき第1貝塚の盗掘坑周辺で採集された遺物は加曾利B1式～B2式土器が主体をなしていたため、貝層の形成時期もおおよそこの時期と推定されている〔阿部ほか 2011, pp. 87～95〕。

2) 慶應義塾中等部の発掘調査(第4・5図)〔慶應義塾中等部考古会 1950〕

椎塚貝塚は過去幾度となく発掘が行なわれてきたが、そのなかでも1949年に慶應義塾中等部が第4貝塚で行なったものは、調査地点のわかる数少ない事例である。椎塚貝塚を理解する上で欠くことのできない貴重な調査報告であることから、詳しく調査の内容を見てみることにしよう。

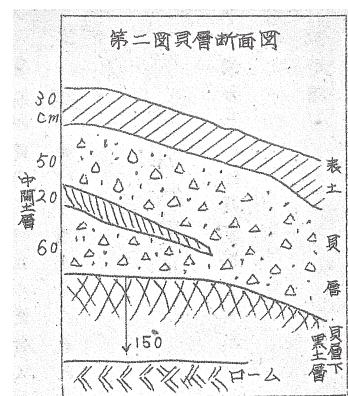
この報告によれば、八木柴三郎等が1893年(明治26)に調査したA・B2ヶ所の貝塚の反対側斜面にて再発見した処女貝層C(第4貝塚)を調査したと記されている〔慶應義塾中等部考古会 1950, pp. 2〕。報告中の図からAが第5貝塚、Bが第1貝塚に比定され、過去繰り返し発掘されてきたのは椎塚貝塚のなかでも第1・第5貝塚が主だったことがこのことから理解できる。

この当時第4貝塚は桑畑で、地表面には長径40mの楕円形に貝殻が散布しており、この中央部の4×4mの範囲が調査の対象となった。貝層は南に向かって傾斜し、トレンチ北半部では貝の混じらない厚さ20cmの土層を挟み上部に50cm、下部に60cmの厚みを持つ貝層が検出されている(第4図)。貝類は同一種がまとまることや合わせ貝が多いことが指摘されており、遺存状況は極めて良好だったことがわかる。貝類の鑑定は大山桂が行なっており、ハマグリ・サルボウ・シオフキ・オキシジミが主体を占め、これに次いでアカニシが多出することが指摘されている。またオキアサリが検出されていることも注意される。

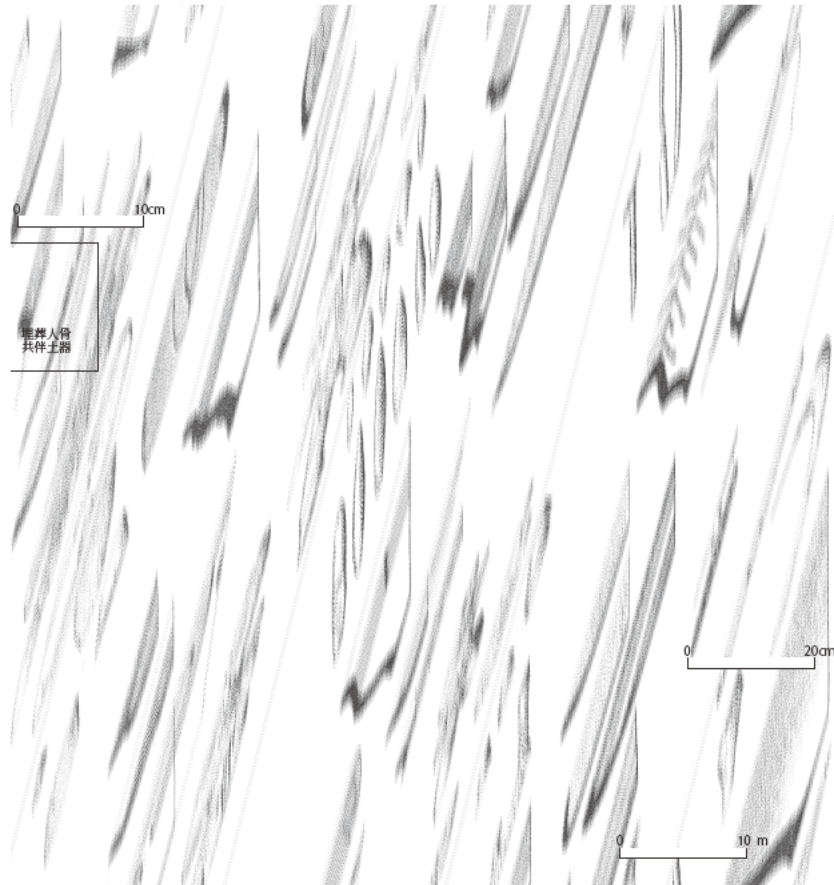
とくに注目されるのはこの貝層下から仰臥屈葬の埋葬人骨が検出されたことである。膝付近からは鉢形土器(第5図埋葬人骨共伴土器)が底を上にして検出されており、人骨が加曾利B式期のものであることがわかる。人骨直上の貝層には掘り込み等認められず、貝層形成前に埋葬されたものと推測できる。

調査区の土層堆積に着目してみると(第4図)、「貝層は傾斜している反面でその下部の黒色土やローム層は水平面を形成し・・・人骨はこの水平な地形上に埋葬されたものと思われ、以後の貝層や中間土層の連続的な堆積によって傾斜面を形成しているようで・・・貝塚形成当初は、急傾斜をみせる現地形とはことなる低位面が存在した可能性」が指摘されている〔阿部ほか 2011, pp. 106〕。椎塚貝塚は痩せ尾根状の立地が特徴的だが、狭い台地上だけでなく周辺の低地を含めた広い範囲が遺跡の形成当初から活動領域として利用されていたことを示唆しており重要である。

またこの調査で出土した遺物の一部を第5図に示した。土器は加曾利B2式～B3式が主体となり、前後の時期の土器が含まれている。文様系列ごとに様々な器種が揃っていることが理解できる良好な資料といえる。石器は数が少ないものの、石鏃・石斧・石皿・凹み石・敲石・砥石などの器種が一揃い出土していることが報告されている。骨角器は数が多く、銚やヤスのほかに釣針の未製品や弓筈、骨針のほか垂飾品や貝輪などが出土している。土偶も22点、耳飾りやスタンブ形土製品などもみられ、調査面積に比してバラエティーに富んだ遺物が大量に出土している。椎塚貝塚ではこれまでに住居跡などの居住施設が検出されたことはないが、こうした多様な遺物組成や



第4図 第4貝塚貝層断面図
(慶應義塾中等部考古会 1950)



第5図 慶應義塾中等部発掘調査地点から出土した遺物（慶應義塾中等部考古会 1950 から作成）

埋葬人骨の存在、貝層の形成など、同時期の集落遺跡と同様の構成を持っており、縄文時代後晩期の集落のひとつと捉えることができよう。

3. 福田貝塚・椎塚貝塚の立地と縄文後晩期集落

これまで採集されている遺物から、福田貝塚と椎塚貝塚の遺跡としての継続時期は後期前葉の堀之内1式から晩期中葉の前浦式と考えることができる〔阿部ほか2011〕。両遺跡はほぼ同時期の遺跡といえ、しかも約3kmと至近の距離に位置しながら、その立地は大きく異なっている。過去の調査例や同時期の遺跡と比較しながらもう少し詳しく両遺跡の特徴についてみていくことにしよう。

1) 長期継続型集落との類似性

福田貝塚は広い平坦面を有する台地上に立地し、西方から遺跡の中央部に入り込む窪地を取り巻く高まりの上に地点貝塚が環状に分布している。今回新たに発見した地点貝塚も、地形図に位置をプロットしてみるとこの高まりの周囲に当たることがわかる。また1979年に平安博物館によって調査された第2貝塚（神明前貝塚）では、明治期以来の発掘によると考えられる攪乱によって貝層の大部分が乱されていたが、この攪乱貝層の下部の黒色土中から堀之内1式期の埋甕と炉跡が発見されている〔渡辺 1991〕。攪乱貝層中からは後期中葉加曾利B式を主体に後期後葉の遺物が出土しており、貝層もこの時期に形成が求められる。このことから第2貝塚（神明前貝塚）地点は、堀之内1式期から加曾利B式期以降にわたる生活面や貝層が累積していたものと想定できる。第2貝塚（神明前貝塚）が立地する高まりの内部には、長期にわたる貝層と遺物包含層の累積構造が包含されて



写真3 椎塚貝塚遠景（西より）



写真4 第3貝塚付近の斜面と谷地形
（第3図中矢印方向から）

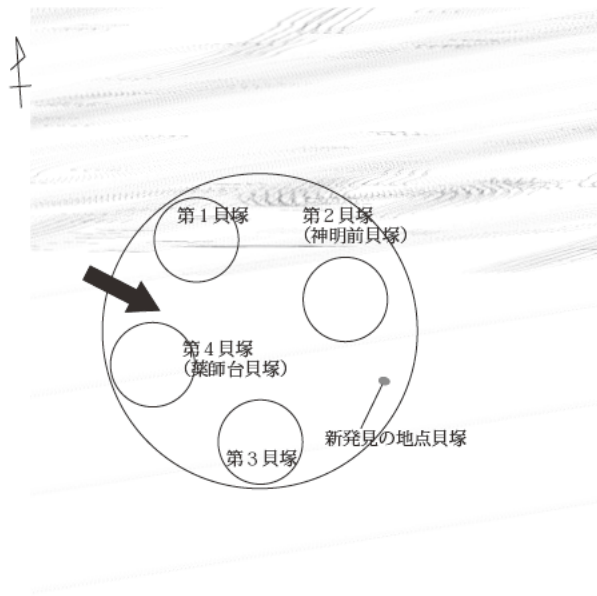
いた可能性が高いのである^(註4)。福田貝塚は中央の窪地を取り巻く環状の高まり部分を中心とした長期的な居住活動の累積が考えられ、このような遺跡の立地と地点貝塚や遺物包含層の累積構造のあり方は、千葉県佐倉市曲輪ノ内貝塚や井野長割遺跡、埼玉県川口市石神貝塚など、これまで「環状盛土遺構」と呼称された後晩期集落との類似性が指摘される〔阿部ほか 2011〕。さらに貝層の形成時期が同時期と想定されることから、貝塚の位置がその廃棄単位、つまり集落を形成した集団の居住単位に対応する可能性を指摘し、類似の集落構造として曲輪ノ内貝塚があげられている（第6図a・b）〔阿部ほか 2011〕。集落景観や占地、規模などの点で両遺跡はよく共通している。

一方で椎塚貝塚は痩せ尾根状の台地の斜面部に形成されており、遺跡の景観や占地は福田貝塚や類例とした曲輪ノ内貝塚と大きく異なっている。ただし斜面貝層が一定の距離を置いて形成されている状況から、貝層の起点が貝層形成に関与した単位集団の居住空間と考えることができ、さらにその単位が4～5ヶ所と、福田・曲輪ノ内貝塚とよく一致した点も認められる（第6図c）〔阿部ほか 2011〕^(註5)。立地、生活面の累積構造、貝塚の形成と単位性といった点と、これまでに採集された遺物の組成などから考えると、椎塚貝塚・福田貝塚は晩期中葉まで続く長期継続型集落との類似点が多く、同様に長期継続型の集落と考えることができる。

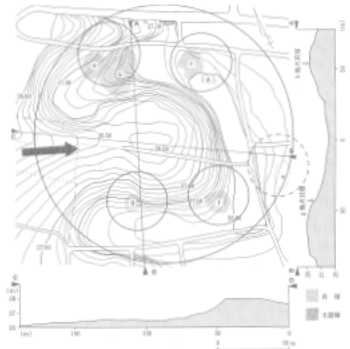
2) 縄文後晩期集落の占地条件

近年縄文後晩期の集落遺跡の調査が進み、長期継続型集落の様相が明らかになりつつある。とくに栃木県小山市寺野東遺跡や埼玉県桶川市後谷遺跡・川口市石神貝塚などでは、居住域と考えられる台地の至近に位置する谷から、湧水の利用施設と考えられる木組遺構が検出されている。第7図に寺野東遺跡例を示したが、ここでは谷に沿って何基もの木組遺構が検出されている。湧水の利用はなにも縄文後晩期に限ったわけではないが、こうした定型化した木組遺構の検出は、全国的にみても縄文後晩期に集中する傾向がある〔佐々木 2007, pp. 55～56〕。おそらく長期にわたって集落を維持するひとつの仕組みとして、水の確保、さらには積極的な湧水の管理が固定的に行なわれたのだろう。

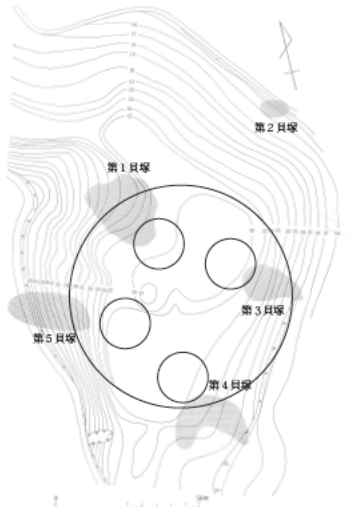
翻って福田・椎塚貝塚の立地する地形を見てみよう。福田貝塚の立地する台地は先述したように三方から小谷が入り込み複雑に浸食されている。遺跡北西の第1貝塚が面する谷および遺跡南西の第4貝塚が面する谷は比較的台地からの傾斜がきついが、北東から第2貝塚の東側にのびる谷の傾斜は、ほかの谷と比べて緩くなだらかなのである（第1図）。実際に歩いてみても容易に谷へおりることができ、さらに遺跡北側の低地へくだることが可能であった（写真2）。畑地であることを差し引いて考えても、ほかの谷に比べ台地から低地へのアクセスに便がよさそうである。また写真2を撮影した付近（第1図中矢印の位置）は地面が湿ってぬかるんでいた。この小谷は谷津田として利用されていた痕跡もあ



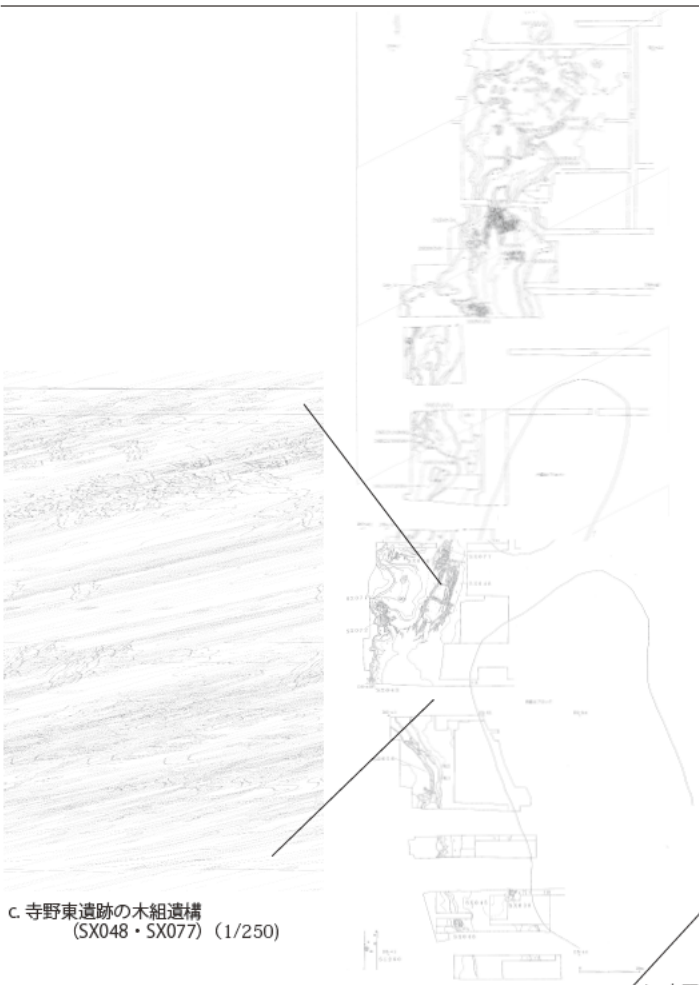
a. 福田貝塚 (1/5,000 : 矢印は窪地の位置)



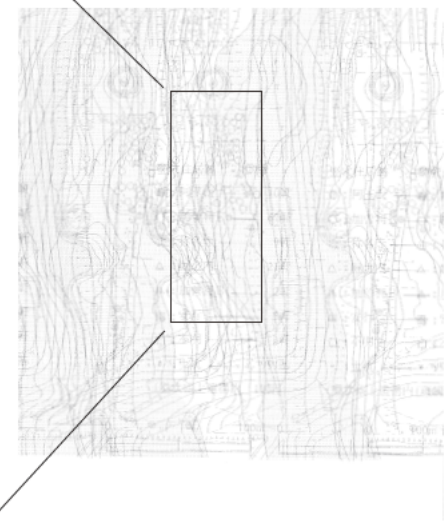
b. 曲輪ノ内貝塚 (1/5,000 : 矢印は窪地の位置)



c. 椎塚貝塚 (1/2,500)



c. 寺野東遺跡の木組遺構 (SX048・SX077) (1/250)



a. 寺野東遺跡周辺地形図 (1/5,000)

b. 寺野東遺跡谷部遺構配置図 (1/1,200)

第 6 図 (上) 福田貝塚・椎塚貝塚・曲輪ノ内貝塚の単位集団の推定 (阿部ほか2011をもとに作成)
 第 7 図 (下) 寺野東遺跡の谷部の遺構と木組遺構 (江原 1998 をもとに作成)

り、近くに湧水の存在が想定される。

椎塚貝塚の場合、遺跡東側に入り込む小野川支谷が注目される。この支谷も谷津田として利用されていたようで、現在も谷頭では湧水が浸み出し流れをなしているのが確認できる。第4貝塚が南面する斜面はこの支谷と緩やかにつづいており、椎塚貝塚で水場の存在を想定するとしたらこの支谷が最有力地といえる（写真3）。慶應義塾中等部の調査によれば、椎塚貝塚の第4貝塚地点では縄文時代にはより緩やかな低位面が存在した可能性が高い点も注目される。低位面での埋葬人骨の存在もこの谷が椎塚貝塚の縄文人の活動領域だったことを裏付けているものと考えられる。

両貝塚の調査が進めばこれらの谷部から縄文人の湧水利用の痕跡が検出される可能性が高いだろう。想像に想像を重ねるようだが、広大で平坦な台地よりも、管理しやすい浅い谷地形と湧水の存在が集落占地の条件としては重要だったのかもしれない。福田貝塚・椎塚貝塚は居住域や貝塚形成地点の地形は異なるが、後晩期集落として見た場合に居住域と谷の関係、貝塚形成の単位性に共通性が見出せる。

両遺跡は考古学の黎明期から多くの発掘が行なわれ、豊富かつ多彩な遺物が当時の研究に大きな役割を果たしたことは想像に難くない。しかし出土遺物が注目される一方で、遺跡の全体像や性格について詳細に語られることはほとんどなかった。ここでは踏査成果や同時期の集落遺跡との比較を通し、両遺跡が縄文後晩期の集落遺跡として位置付けられることを確かめてきた。これまでに発掘された豊富な資料からみると、両遺跡は当時の地域社会においても欠くことのできない重要な位置を占めていたものと思われる。今後は残された資料をもとに両遺跡を当時の地域社会の中に正しく位置付けていくことが重要となってくるだろう。

【註】

- (1) 各地点貝塚の名称は〔阿部ほか 2011, pp. 98〕に準ずる。また第2貝塚が神明前貝塚、第4貝塚が薬師台貝塚と呼称され、古くから発掘が繰り返し行なわれてきた地点である。
- (2) 各地点貝塚の名称は〔阿部ほか 2011, pp. 87〕に準ずる。
- (3) 筆者は2010・2011年1月の踏査には参加していないが、2011年12月に行なった踏査でも第1貝塚においておびただしい数の盗掘坑を目の当たりにした。すべての踏査に参加された阿部芳郎氏によれば、前回よりも盗掘坑は増えているとのことであった。盗掘行為は繰り返し行なわれており、対応は急を要する。
- (4) 下郷コレクションでも薬師前（台）貝塚と呼称された地点（第4貝塚）から採集された土器は堀之内式から加曾利B式期を主体としており、同様の状況があったことが想定される〔阿部ほか 2011〕。
- (5) 阿部芳郎氏は、環状を呈する後・晩期の集落や貝塚は、4～5つ程度の居住痕跡の累積した高まりや居住ブロックから構成されていることを指摘し、これらが集落を形成する基本的な単位集団を示すものと考えている〔阿部ほか 2011, pp. 108〕。

【引用・参考文献】

- 阿部 芳郎・阿部 藍・奥石 梨絵・斉藤 郁・杉木 有紗 2011 「考古コレクション形成過程に関する基礎的研究—下郷伝平コレクションにおける椎塚貝塚・福田貝塚資料の由来—」『駿台史学』第142号，駿台史学会，pp. 85～110
- 江原 英 1998 『寺野東遺跡Ⅳ』，財団法人栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター
- 川上 博義 1979 「椎塚貝塚」『茨城県史料考古史料編先土器・縄文時代』，茨城県
- 慶應義塾中等部考古會 1950 『茨城県稲敷郡椎塚貝塚』
- 佐々木 由香 2007 「水場遺構」『縄文時代の考古学』5，同成社
- 渡辺 誠 1979 「福田貝塚」『茨城県史料考古史料編先土器・縄文時代』，茨城県
- 渡辺 誠 1991 『茨城県福田（神明前）貝塚』，財団法人古代学協会